# 展示資料釈文

【凡例】

・釈文は原本を展示する資料に限って掲載する。
・翻刻は適宜、読点と並列点を補った。
・字体は常用漢字を使用した。
・翻刻の改行はできる限り原本に従った。
・朱書きの文字は『　』で示した。
・誤字等については〔　〕で修正案を示した。
・文字が判読できない場合は、その文字数を考慮して□や［　］で示し、文字を推定しうるものについては（　）内に案を示した。また、抹消した文字については■で示し、元の文字を（　）内に示した。

## 第一章　広橋家の当主と日記

◆『経光卿暦記』自安貞元年十月十日至十二月二十九日（前期展示）

安貞元年（一二二七）十月十三日条末尾

畢
次書。長者宣之後、加懸帋細紙捻入手文所用意也、次
結上下召下家司給之、召儲舎人、遣南都勅使弁許、右中弁親俊朝臣也、
頃之刑部卿被仰下云、法成寺執行事、先執行入滅之後、子
法橋隆経内々雖被仰下、令旨日次尋陰陽師可択申之
由者、今両三日之間可申上云々、又予申上云、春日行幸可候之
由風聞、一定候者可存知候、御返事云、公家事頭親長朝臣
未随事、出仕之後可有沙汰、其時可被仰下云々、所司弾正忠
信重云、一品経事可申沙汰、其国未定云々、此事委相尋之後、
可申沙汰也、

同十四日条

十月十四日以下委細記在奥、大概許記暦、

天晴、参殿下、

◆『経光卿記』自安貞元年十月十四日至二十七日（前期展示）

安貞元年十月十四日条

嘉禄三年（一二二七）

十月

十四日、庚申、天晴、未刻許著布衣（頗如木、指貫ハ用冬也、雁衣先々白袴也、）参殿下、小雑色少々所召具也、居蔵人所尋所司入見参、良久之後、刑部卿来、可被仰御堂寺務日次主計頭宣俊朝臣請文所入見参也、御返事云、廿日可被仰下、而前日清書令旨可持参者、次予退出、入晩頭戸部・摂州等来、有小連句、予執筆、陽唐韻也、

◆『経光卿暦記』自安貞元年七月一日至九月三十日（後期展示）

安貞元年七月八日条

八日、乙酉、天晴、中納言殿令参中宮御所給、今日発心地発日也云々、令著束帯給、網代車如恒、後聞、参入、前藤大納言実宣卿・近衛大納言家良卿、左衛門督具実卿・中納言殿・権大夫盛□（兼卿）□・二位忠行卿・二位中将基良卿・。平宰相経高卿・侍従宰相為家卿・左大弁宰相家光卿、右大弁宰相範輔卿・三位中将基輔卿・二条三位成長卿等云々、未斜落。之由、有風聞云々、御験者権律師定厳（権大夫盛兼卿兄、僧正弟子、）、於寝殿南面給禄、（本所禄、）権大夫取之云々、次宣陽門院御方近衛大納言取之云々、次退出云々、雲客等兼下立■■蔵人所屏前、皆悉送之云々、権大夫

盛兼卿。子侍従忠兼褰車簾云々、次依召御猶
験者参殿下御方、給御剣、二位中将取之云々、
次被引御馬、御随身二人引之云々、依増
坊門女於禄二於肩退出云々、少将定平・資俊
等朝臣取之云々、今日事重厳之由、黄
門有御定、

◆『経光卿記』自安貞二年十月一日至三十日（後期展示）

安貞二年十月一日条（一二二八）

安貞二年
十月一日、辛丑、天晴、今日勾当内侍内々下給内裏御服、
表御袴、御下襲、縮線綾、依密々事不及入平裏、兼付勾当内侍所
申入也、又中納言殿書一行、内裏二位局許令遣給、慶
賀事、自愛日新之由令載給、中納言殿著束帯令
平座参内給、依平座也、藤中納言公氏卿・左大弁家光卿等参入云々、
抑宜陽殿装束、々々使官掌為継宅、大理付使庁使
致苛責之間、良久宜陽殿不装束云々、御更衣
奉行職事左衛門権佐信盛即行平座、而称犬死之穢
不参云々、

◆『兼仲卿記』自建治元年十月二十一日至同月二十九日（前期展示）

建治元年十月二十一日条（一二七五）

（前略）今夕儀、無為被遂行、且珍重々々、子刻
許、帰河東宿所、抑今日以挙俊被仰下云、申次事可存知、
自明日。着下袴可祗候之由有仰、於伝奏者殿中重役、又大事也、
此事已及両度、所自愛入也、俊嗣同奉之、左中丞令奉　」

執事々給、此職競望之輩済々焉云々、無相違之条、
所為悦也、当南山之斗藪、多吉慶、併神慮之至歟、後
栄尤有憑者也、一条殿自今朝已閉門云々、時移事変如夢、　」
後日相尋官・外記続加之、
（異筆）「正三位行権中納言藤原朝臣
資宣宣、奉勅、摂政前太政大臣乗牛
車、出入宮中如旧者、
建治元年十月廿一日大外記兼博士越前権守中原朝臣師顕奉」
「別紙也、」
「正三位行権中納言藤原朝臣資宣宣、奉
勅、摂政前太政大臣宜為藤氏長者者、
建治元年十月廿一日大外記兼丶丶丶丶奉」　」

◆『兼仲卿記』自建治元年十一月二十一日至同月三十日（前期展示）

## 建治元年十一月七日条

今日被仰条々如此、御教書等悉書給政所了、法性慈徳・元慶寺・
法成寺等、書副私状可進入。浄土寺僧正御房之由、付円暹法印了、今日被補内〔竪〕頭、祗候侍
助康子息助有、所被補也、以御教書仰之、
以子息助有可被補内竪頭、可被存知者、摂政殿仰如此、悉之、以状、
（頭書）「内竪頭事、嘉禎召名簿於所司、付職事、十一月七日左中弁在判　中新左衛門尉殿々々下知出納告示其仁、文永五以御教書仰之、
今度又如此、為後日記之、」
八日、甲戌、晴、辰一点、参殿下、中丞同令参給、今日御直衣始也、
御出以前、先有御馬御覧儀、御随身遅参、被責催、午上人々
参集進、於二棟南面有御覧、主人御坐簾中、堀川前中納言高定布衣、下括、

◆『兼仲卿記』自正応二年四月十三日至五月五日（後期展示）

## 正応二年四月十三日条（一二八九）

（端裏書）「正応二年四五月記五月在別　右中弁藤原兼仲」

正応二年四月十三日、壬戌、晴、日中懺法読畢、令休息、〔申〕之斜、

自近衛殿兼俊奉〔書〕行到来、可有宣下事、其間事有可被

仰之子細、今間可参仕之由、被仰下、即可参之由、献請文了、少時又

宗成朝臣奉書到来、同前也、即帰蓬屋、着布衣参御

所、于時酉斜也、人々群参如稲麻竹葦、是存内也、予以

宗成朝臣令申参仕之由、有出御々出居、任代々佳例可奉行

之由蒙御定、心中之喜悦無物于取喩者也、今夕内記不

参之間、詔書可草進之由、職事顕家奉書到来、即退

出、令草詔書、戴竹皮所参内也、先之上卿左衛門督殿

所有御参内也、少時御着陣、予候床子。四位左大史秀氏 師宗大外記師顕・師定

師冬大夫史顕衡等兼着座、予令着之間、此輩等所動座也、

職事顕家宣下称、右大臣藤原朝臣可摂行万機之由、

令作詔書ヨ、上卿召予、参軾、奉詔書事退入、次召外

記筥入草、宿帋書之、進上卿、々々御覧了進弓場、招職

事、被奏聞、予持筥奉相随、顕家出逢取之、参

御所方、其間上卿佇立弓場、予所祗候也、少時被返下

草、上卿令取筥給、被返下予、々取替清書、更進之、

上卿又招職事、如初被奏覧、少時被返下、有御画、挿入日許也、

上卿令帰着陣座給、予奉相順、進詔書之後退入、

上卿召外記被下之、本儀中務輔可下賜、而今夕不参之間、

外記勤輔代、次職事宣下藤氏長者事、上卿召外記、

被下知之、尤可被仰下官之処、不然令起陣座給之間、予

参進、不審申上、且其由可下知之由、被仰下之間、所下知官務

也、次予退出、参近衛殿、参御出居、申宣下畢之由、

只今御装束之程也、上卿又有還御、師顕遅参之間所催促

也、頃之参仕、秀氏宿禰・師顕等着侍所、主人有出御

賓筵、（御硯・脇息等被撤却也、）左衛門督殿御着座、予参進、跪御坐（公卿座末紫畳撤之、敷満小文高麗端、此外無別御装束、）
次間、申大外記参之由、可召之由有御気色、帰出於侍所告
召由於大外記師顕、入。（関白并藤氏長者）宣旨於筥蓋持参、入中門車寄戸、
於簀子伺御目、高称唯参御前、膝行如例、宣旨令取
給之後、師顕退候次間末程、御覧了被押出筥蓋、更
参進賜之退出、次入御、秀氏持参宣旨、予。（出逢）持参之、
被返下空筥、先々或不及御覧申入退出、或又被御覧者也、
両様不同歟、毎事無為、公私之佳瑞、可貴可恐、幸甚々々、
抑職事仰詞、摂行万機、若摂政之時仰詞歟、任建長例之由
令自称、件度者鷹司大殿令蒙摂政詔給之時也、為之
如〔何〕件、件詔書云、
〃　〃〃〃〃
「正二位行権中納言兼左衛門督
藤原朝臣兼教宣、奉勅、万機
巨細宜令右大臣関白者、
正応二年四月十三日　弾正少弼兼大外記大隅守中原師顕奉」
「正二位行権中納言兼左衛門督藤原
朝臣兼教宣、奉勅、関白右大臣
宜為藤氏長者者、
正応二年四月十三日　弾正少弼兼大外記大隅守中原師顕奉」
「右中弁藤原朝臣兼仲伝宣、権中納言
藤原朝臣兼教宣、奉勅、宜令関白右大
臣為氏長者者、
正応二年四月十三日　修理東大寺大仏庁官左大史兼隠岐守小槻宿禰秀氏奉」

◆『兼仲卿記』自文永十一年正月一日至十二月三十日（後期展示）

## 文永十一年（一二七四）十月二十二日・同月二十九日・十一月六日条

『翼水』廿二日、甲子、金除沐浴　辟坤　大小歳前　加冠吉
『大将軍遊東　土公遊北』

自夜雨降、巳刻以後雨脚漸休、天顔猶陰、今日大嘗会御禊也、
甚雨不休（別紙紙継）者、可及予儀之処、忽止之間、今日所被果遂也、
早旦経尹出立、予所加扶持也、令沙汰立之後、与三品同車、於二条
京極立車見物、今日幸路立見物車可禁制之由有其説、仍
於二条面辻子固武士後密立之見物、無不足者也、上皇任代々例、
以晴儀可有御見物、（今度不被儲御桟敷、如斎王御禊御見物、七丈幄〈二条内裏北面、〉可被立御車、上達部・殿上人等同為幄屋、御幸歩儀之由、院司右少弁忠世相催之、建久歩儀也、就倹約被略御桟敷不被儲御桟敷歟、）而異国事、俄自昨日停止云々、
去十三日於対馬島少卿（筑紫）代官凶賊等合戦云々、依此事資能法師
差遣飛脚於関東云々、興盛之沙汰驚遽無極者也、我朝神
国也、定有宗廟之御冥助歟、可貴者也、申斜御輿令
渡大路給、依雨千乗万騎等有猶予歟、（及数刻云々、）今日事、蔵人
（中略）
『尾水』廿九日、辛未、土成　大歳前、厭対　入学吉
『三宝吉　天一未申　忌夜行』
陰、異国賊徒責来之間興盛之由風聞、（関東）武家辺騒動云々、或説云、
北条六郎并式部大夫時輔等打上云々、是非未決、怖畏無極者也、
（中略）
『辟水』六日、戊寅、土満（武始交）『伐』　大小歳後、帰忌　拝官吉　日遊在内
『三宝吉　土公遊東　不視病』除手足甲
晴、或人云、・凶賊（去比）船数万艘浮海上、而俄逆風吹来、吹帰本国、少々又（船）
馳上陸上、仍大（式部大夫）鞆郎従等凶賊（許）五十余人令虜掠之、皆搦置彼輩等、
（裏書）
一六日下、
召具之、可令参洛云々、逆風事、神明之御加被歟、無止（事）可貴、
其憑不少者也、近日内外法御祈、諸社奉幣連綿、無他
事云々、」

◆『兼宣公記』自嘉慶元年正月一日至康応元年十二月二十日

## 嘉慶元年（一三八七）十二月二十七日～同二年（一三八八）正月七日条（前期展示）

廿六日、晴、自今夜被始行県召除目、家君（広橋仲光）
内、余聊依有歓楽事不参　内、除目々六重光（裏松）
（紙背文書端裏）「御院参　御祈事」
取之云々、
廿七日、陰、午一点参　内、依当番也、除目中夜也、家君
御参　内、

嘉慶二年去年八月廿四日改至徳四年為嘉慶也、
正月
一日、天。風静、犠年迎節之時、鳳暦無窮之春、
幸甚々々、
秉燭程家君御参　内、余同之、節会左少弁重光
所申沙汰也、
参仕人々
左大臣殿（足利義満）・内大臣（徳大寺実時）・西園寺大納言公永・万里少路大納言嗣房（裏松）・
新大納言資康・家君帥中納言・四辻中納言季顕・日野中納言資教・
坊城中納言俊任・勧修寺中納言経重・中御門宰相宣方・正親町宰相
中将公仲・九条宰相氏房・三条宰相中将実豊
腋御膳事与奪之間、余所申沙汰也、暁天事了、家君御退
出、余同之、供薬蔵人右中弁資藤（町）奉行、
二日、晴、白馬節会余可申沙汰之間、御教書多以書之、
可為殿上淵酔今夕之由、被相催之間、秉燭程着束
帯着半臂、参内、暁更事終退出、

四日、自夜雨下、及午属晴、家君御参賀室町殿（足利義満）并
摂政殿（近衛兼嗣）・管領宿所（斯波義将）等、次又御参　内、
七日、雨雪交下、人日之吉兆、毎時可任所存者也、珍重
幸甚々々、今日節会、室町殿可有御参　内剋限、殊
忿可申沙汰之由、昨夕蒙仰之間、未初参　内、事具後
申終程、家君以御状被申事之由於室町殿之処、自
夜前聊有御歓楽之御気、雖然片時自御直廬、可有
御参之由、被進御返事者也、御参　内以前、北陣事、早々
申沙汰者也、

## 嘉慶二年十二月三十日～同三年正月一日条（一三八九）（後期展示）

十二月

卅日、晴、時々雪花飛、追儺依分配所申沙汰也、上卿
甘露寺中納言（兼長卿）、弁余可参也、次将更無領状、遂以
不参、為之如何、不参事、於先例者連綿也云々、
抑執権（勧修寺経重）奉書　到来、追儺次可被行小除目、可申
沙汰云々、可存知之由返答、則相催極臈（高倉永俊）并両　局者也、
執筆参議少々雖相催、更以無領状、仍余可勲仕者也、
晡天執権以使者令申家君（広橋仲光）云、大納言御昇進事、
自室町殿（足利義満）御　執　奏之間　勅許候、可有御存知哉云々、
内々入魂申之条、尤感悦之由御返答、珍重々々、家君
則御参室町殿、余晩頭参　仙洞、依召参御前、小折紙
被下之、次参室町殿（准后）、家君自元御参候、進上
勅筆之小折紙、次参　関白（二条師嗣）、次　参　内、半更事了退
出、
家君御昇進事、相当申沙汰、殊添自愛気者也、
万幸々々、明旦可散砂於門前之由、所加下知也、

嘉慶三年

正月

一日、天晴、風静、肇年之祝詞、家門之繁昌、云彼云是幸甚々々、就中家君御昇進相当年始条、祝言自然得時者哉、誇寿域、散砂於門之内外、是依御昇進也、且又年始也、旁珍重々々、節会余所申沙汰也、酉斜参　内、巡方、魚袋、家君内々所有御参　内衣冠、上※也、余依為節会之奉行也、今夜参仕公卿、先参　院拝礼、次参　内之間、及半更節会被始行者也、節会以前有供薬儀、蔵人右少弁宣俊（中御門）所申沙汰也、

◆『兼宣公記』自応永九年正月一日至二月十七日（前期展示）

応永九年（一四〇二）正月五日～六日条

五日、終日甚雨、禅閤御張行・風呂、葉室入道大納言（宗顕）父・治部卿親良（西洞院）朝臣・藤井前宰相（嗣尹・嗣孝）父子・尺念法師・俊重（大江）朝臣・頼定（丹波）等参仕、於当座有鬮、被出引物、人々入興、万年不可相違、祝着儀也、入夜人々分散、

六日、天晴、時々小雨、午初禅閤（広橋仲光）御参北山殿（足利義満）、予同参、着束帯、是依可覧吉書也、武衛（広橋定光）同参　束帯、拾遺（広橋資光）同参　狩

衣、
覧吉書後、小冠両人被下御服、年始
祝着何事如之、珍重々々、次有叙人
沙汰、予一級（正三位）事有御沙汰、納
言
内予最末也、従三位納言両人（公音卿・実敦卿、）
也、
令超越了、当時眉目、家門之餘慶也、次（御）参
女院（崇賢門院）予以下小冠等同参、
姫君（足利義満女）御方并
寝殿（裏松康子）等御座（入）云々、数盃之後御退出、直渡
御
（日野重光）北少路前大納言宿所、是就豊光（烏丸）一級
事、
委（依有）。可被仰事子細也、小折紙事、以長頼（東坊城）
被申執柄（一条経嗣）三、献後有御帰、予・武衛等同
之、
次予改着直衣召具武衛小冠、参賀陽明、
覧吉書、次又参賀、則退出、

◆『兼宣公記』自応永九年正月一日至二月十七日（後期展示）

**応永九年正月十三日～十四日条**

新春□□、雖事
旧候、如御意御満足
可有斯春候、尚々幸甚
珍重々々、
抑自来廿二日可被始行

御祈之由、可存知仕候、就其
外典御祈者、可為七个夜
天曹地府御祭候、近来
今月外典御祭以之
被行候、今年太一定分
御厄消除事、御祭文
可被戴之由、可被仰候也、
千万之御慶、近日必々
可参賀仕候、恐惶謹言、
正月十三日　有（土御門）世
十四日、天晴、未明予参北山殿、東南院宮（観海法親王）参賀給、
為申次也、次又廻御祈、自明後日妙法院宮（堯仁法親王）可有
御勤仕之間、供料三千疋事、同伺申入之後、参
女院御所（崇賢門院）、今日可有渡御此宿所之間、珍重
由且申入退出、則被進車於女院御所、午
初渡御、上臈并御寮・二条尼・喝食并きこ・
性珍喝食等参仕、昨日女院御所様被招請南（裏松康子）
御所、是又毎年儀也、御服以下被進種々御重
宝云々、今日予進御引出物於女院様并
上臈以下、是初度也、旧年祝着以後、如此致
沙汰者也、千春万年不可相違、珍重之由有
仰、酉初還御、入夜予参老堂（兼宣母）■（昨日）■
讃岐入道（細川義之）　同出逢、自老堂給小袖一重并檀
紙十帖、亭主禅門給白太刀、是等皆■（去）
不相違去年儀之者也、珍重々々、

◆『兼宣公記』自応永二十四年正月一日至十五日（前期展示）

## 応永二十四年正月冒頭（一四一七）

応永廿四年具注暦日　丁酉歳（干火、支金、納音是欠、）　凡三百八十四日

大歳在丁酉（『名作疆之歳、為一年君、不可将兵抵向、』）　大将軍在午　大陰在亥

歳徳在北宮壬（合在丁、壬丁上取土、及修造）　歳刑在酉　歳破在卯

歳　殺　在　辰　　黄幡在丑　　豹尾在未

右件大歳已下、其地不可穿鑿動治、因有

頽壊事、須修営者、其日与歳徳・月徳・歳徳

合・月徳合・天恩・天赦・母倉并者、修営无妨、

『歳次大梁』

『右件歳次所在、其国有福、不可将兵抵向、』

正月大（二月大　三月小　四月大　五月小　閏五月小　六月大　七月小　八月小　九月大　十月大　十一月小　十二月大）

壬　天道南行、天徳在丁、月殺在丑、用時（甲丙庚壬）

正月大　建『土府在丑　　土公在竈』

寅　月徳在丙、合在辛、月空在壬、三鏡（乙辛乾坤巽艮）

『大将軍遊内、天一子、』

（『室宿月曜』）一日、戊子、火閉、鷙鳥、癘疾、逐陣、帰忌、血忌、无翹、復、日遊在内、

（以下、補紙）

天晴、風静、将迎三元之初節、宜謳万国

之太平春也、幸甚々々、家門之繁昌、子孫之

相続、云寿云福可任所存間、早旦奉拝

尊神以下者也、任万歳之恒例、進上賀札於

崇賢門院、被遊下御返事、依添祝着之

気味、所続加也、

◆『兼宣公記』自応永二十四年正月一日至十五日（後期展示）

## 応永二十四年正月七日～八日条

白馬節会

公卿

二条大納言（持基）　新大納言（木造持康）
藤中納言（土御門資家）　新中納言（裏辻実秀）
日野中納言（有光）　吉田宰相（清閑寺家俊）
中御門宰相（宣輔）　時房朝臣（万里小路）
少納言
惟有（平）朝臣
辨
盛光（日野西）
次将
左
（見返）
「資敦（平松）朝臣　雅清朝（飛鳥井）臣
隆豊（鷲尾）朝臣　資雅（白川）朝臣
右
教豊（山科）朝臣　兼英（楊梅）朝臣」

八日、乙未、晴、
早旦参室町殿（足利義持）、今夕女叙位、散状奉行蔵人右少弁
（以下補紙）
経興（勧修寺）付　給之間、所持参也、南向（足利義持側室、徳大寺公俊妹）従三位加階事、余書折紙、可進　仙洞（後小松上皇）之由　有仰、御名字事、先日伺申之処、可相談左大将（徳大寺公俊）云々、仍相談之処、三字書載折紙注送之間、
披露之処、可為俊字由被治定者也、
定子　継　康子　（合点あり）俊子
散状并聞書如此、典侍（広橋綱子）殿加級事、以台盤所札面、奉行
職事造申文之処、正五位下之由書上之間、任申文執筆叙之云々、

◆『兼宣公記』自応永三十一年三月一日至二十九日（前期展示）

## 応永三十一年三月二十三日条（一四二四）

廿三日、己亥、雨下、有雷鳴、

午剋着狩衣参　仙洞（後小松上皇）是　依御千句連歌也、

先之三条大納言（正親町三条公雅）・同中納言（三条西公保）・藤中納言（柳原行光）・宰相入道（高倉永俊）・

新三位（四条隆盛）・教豊（山科）・永基（冷泉）・為清等（五条）　朝臣・典薬頭

郷成朝（和気）　臣・善恭法師（丹波定康）　等祗候、召次幸末佐

懃執筆、自申斜被始行、至五百韻之初折

天明之間、まつ被閣之、此御連哥事、此間自

院被仰下旨　勅書所続加也、」

申されて候　　申され候し

ほとに　　むもしの（足利義持）

さためられ候　　いかやうにも　　御ほく（発句）を

ハんとて、

かやうに

ひら野まつりの

申され候、

ほくの

上卿の事、

千句を　　しけん・（執権、日野有光）

御人す、　　二三日の　　万中か（万里小路時房）

なにとなく　　うちに

御ふしんのため（不審）

御さた候　　あいた、おほせ

ハんと　　られ候へく候、

おほしめ

し候、　　さて一日　　」

申され候よし、　あさてよりと　　ちと

申せとて候、

かしく、

申され候ふん

にても候ハゝ、　　おほえ候、

さためて御しこう　　御しこう（祇候）

候て、

御せゐ（製）の

候ハてやと、　　御わき（脇）を

をかしく候て、

うるハしう　　一く（句）

そと御わき　　申され候へ、

あまりに

さりぬへき

一二百いん（韻）なと（×の）に、　　名字を

両日ハかり　　けかし候

ハんする

御しこう候ハゝ、　　人さへ

候ましき

ほとに、

めてたく候へく候、　　たゝ

たゝいま　　御人す(数)に

わき御せゐも　　なと

（切封墨引）

ひろハしとのへ

◆『兼宣公記』自応永三十二年七月三日至八月十四日（後期展示）

応永三十二年七月二十九日条（一四二五）

廿九日、晴、　内裏(称光天皇)仰云、　国母二位局院号事、可有
申御沙汰之由被申室町殿(足利義持)　之間、為室町殿御使
余参　院(後小松上皇)則可申　沙汰之由、可仰蔵人右中弁俊国之
由有　院仰之間、忿召俊国仰　勅定旨、参
陣公卿事、奉　勅定余於　仙洞御前書之、下
俊国者也、
入夜参　院、俊国同祗候、　院司等事伺申入
者也、　勅筆如此、右大弁宰相宣(広橋)光　朝臣、可被
召加之由雖可申入、近日依　内裏叡慮不及
出仕間、不及申出者也、

申

さたし候へと、　　これにて候

おほせ　　こそと

られ候へ　　おほえ候、

きと

しゆこう（准后）ならひに
院かう（号）の申さたの
しきし（職事）、
かもん（家門）の人々とも　とし（俊）国条々
こよひハ　申さた候
しよひ（叙位）　をりふ
かなひ　しにて候へとも、
も　さてこそハ、
候ハし、
あすの　ふん、
いそき
下され候へく候
よし、
申せとて候、
かしく、
ひろハし（広橋殿）とのへ

◆『綱光公記』自文安三年正月一日至十二月三十日（通期展示）

文安元年（一四四四）正月一日～五日条

一日己巳、

天晴、風和、新春家門慶賀、（広橋兼郷）家君 今春可有御出仕者也、毎々珍重々々、

「御」［×新］局「御陪膳」［×三ヶ日御排槽］御云々、珍重々々、今夜元日節会也、

毎々幸甚々々、

二日庚午、

天晴、

三日辛未、

天晴、例日也、毎事珍重々々、

四日壬申、■（金破）■

天晴、早旦参賀 室町殿、当年初参「也」［×云々］、人々参賀構見参、御盃「拝」

［×等］領、祝着者也、退出後 裏（日野勝光）松 亭出向了、此外管領（細川）所々出向者也、毎々祝

着、自今春家門慶賀勿論々々、

抑午時着衣冠 禁裏並 伏見（貞成親王）宮・陽（近衛房嗣）明・鷹（房平）司「殿」［×家］参賀、禁裏

参御前、天盃拝領、祝着無極者也、退出時御房〔局カ〕参「吐」、祝着、有御盃、自

愛々々、

五日癸酉、■（金危）■

天晴、秉燭時分大雪下、今夜叙位也、「然而」［×併］殿（近衛房嗣）下 関白御拝賀云々、

余供奉也、（広橋兼郷）家君「任御指南」［×任御指南］供奉者也、秉燭時分、着束帯、

亥時 相催 間 参 殿 下、「令」［×撤］御 出 座 給、有 三 献、抑 年 預

治（竹屋）部大（綱光）輔（曽祖父）冬（仲光ノ孫）俊（西洞院）也、但不参、依未練歟、時兼朝臣相催之、無念事也、雖

「然」［×時］御乗車時「参会」［×被参］、路次落馬之由聞也、比興々々、

抑藤井嗣祐不取松明歟、可謂未練、余着禁色間、不取松明条勿論也、余見進退学、是条

比興々々、「散」［×散］状具「右」〔左カ〕、装束并僮僕・馬・具足色目、

縫「腋」［×腋］袍、丸鞆帯、襯（公卿依為禁色）、裾（同）、袖単（同）、「表」［×表］、袴（禁裏御服申出）、大

帷、檜扇、赤大口、撤釼笏、大和鞍、鏡「轡」［×鞦］、段〔緞〕手綱、壺鐙、切付（虎

文）、貫鞘（同文）、力皮（赤革）、差々縄、引指縄、泥障、総、腹帯（二重、白布）、■（表敷）■表腹帯（青地

錦）、表敷（同）、馬、

雑色「四本」［×四本］、舎人一人、笠持一人、笠袋、沓、

以上、

抑行列近衛東洞院「致」〔到カ〕「陣」［×陳］、以下薦為前、「次」［×就其］有御着「陣」［×陳］、其以後退出、参御房〔局カ〕、叙位儀天明以後事終、

◆『綱光公記』自寛正五年六月十八日至十二月二十九日（通期展示）

**寛正五年（一四六〇）七月二十四日条**

廿四日乙亥、

晴、今日更申直衣始事、御教書如此、

「着直衣可令参内給者、

天気所候也、仍上啓如件、

七月廿四日　左中将宗綱

謹上　広橋中納言殿」

◆『綱光公記』自享徳三年正月一日至十二月二十九日（通期展示）

**享徳三年（一四五四）七月三日～七日条**

三日癸丑、

晴、七夕詩題、為甘露寺中納言（親長）奉行相催、内々奉書如此、毎年儀也、

「挿入紙一重ニテ加礼紙、無懸紙也、密々内々儀故也、

『月為牛女媒、（題中取韻、）

右題七夕内々御会、

可令作進給之由被

仰下候也、恐々謹言、

七月三日　　親長（甘露寺）

右大弁宰相（広橋綱光）殿』」

四日甲寅、

晴、為御方違俄今夕室町殿日野（勝光）亭渡御、仍所参会也、今夜御座之、入夜帰宅、

大方殿（日野重子）同御出、珍重々々、美物両種遣之、

五日乙卯、

晴、雨少下、向日野亭、　室町殿今日可有還御云々、有御短尺、御出題也、一首予詠進之、兼待七夕也、及晩還御之後帰宅、折五合沙汰、今日又遣日野亭了、

六日丙辰、

晴、及晩向日野亭、昨日儀為賀也、次向細河典厩（持賢）宿所、是中嶋一円拝領礼也、遣剣対面謝之、

明日愚作准后（一条兼良）申談処、少々被直付、為悦々々、自方々草花到来、今日御祝言嘉酒等献慈母（豊子女王）、千幸万歳儀也、御局（広橋綱子）等御出、珍重々々、雖有不可説次第、無記益、

七日丁巳、

晴、及晩夕立雷鳴、迎二星良辰、綴七葉永言如例年、和漢間雖可張行、禅閤御事加斟酌、瑞雲院等入来給、草花一□進上、内々如例年、

「内々（挿入紙）七夕詩歌御会、予懐紙催〃催〃御〃短〃尺〃処〃御短尺処依仰付奉行甘露寺中納言、愚作如此、准后申談、少々被付墨畢、

七夕同賦月為牛女媒、

一首、（題中取韻、）

参議右大弁藤原綱光

風捲浮雲月色開宮人

乞巧上瑶台双星今

夜可成約一片嫦娥

是好媒」

為内々儀間、不及披講者也、如毎年、菅中納言（東坊城益長）・右中弁高清（海住山）今年献作、其外如去年、見一座、

◆『綱光公暦記』自応仁元年三月十一日至十二月二十九日（首間缺）（通期展示）

## 応仁元年（一四六七）五月二十五日～二十九日条

廿五日己丑、晴、依番参内、一盞張行、及晩有物忿之説、細河与一色（義直）陣相論云々、忿退出之処、入夜上下忿劇也、寅刻計、細河右京大夫（勝元）率京極（持清）并赤松（政則）群兵、参室町殿云々、乍驚相尋之処、四足門前、凡四方囲申云々、言語道断次第也、即一色没落、於小河成身院手及合戦、予忿参御所、已及天明程也、室町殿東面京極一党警固、更不入之間、廻計略参入者也、若公（義尚）只今渡御也、殿中番衆・小番輩警固而已、

廿六日庚寅、晴、自早旦所々合戦、太田垣（山名手）自細河押寄放火、一条大路猪隈合戦、兼種（卜部）宿祢以下放火、細河兵部大輔（勝久）、畠山（政長）群兵馳向放火、女房等死云々、細河讃岐守（成之）与管領（斯波義廉）・畠山（義就）合戦、死人如山云々、時声「南北」［×四方］喧、城中末代作法、為之如何、凡今度儀諸大名数十人引分合戦之間、不及公儀、敢無朝敵、只自他振威勢而已也、

廿七日辛卯、晴、今日又合戦、自昨夜　室町殿宿直、智恩寺・行願寺以下所々放火、法滅時来歟、歎入之外無他、

廿八日壬辰、晴、浄菩提寺焼失、一条院以来寺也、安居院坊為合戦場炎上、驚歎入之外無他、代々家門無他、略子細也、不及力、本尊以下無為云々、猪隈（良春カ）僧正坊同焼失、冷泉家同之、凡一条辺及荒野、眼前之衰、乱国極、不及言詞、

廿九日癸巳、晴、早旦瑞雲院（勘解由小路兼綱）為六角手放火云々、存外也、祖父入道殿（広橋兼宣）御建立、瑞雲院殿（勘解由小路兼綱）以来御居住寺也、歎有余、本尊以下無為也、自鷹司宰相中将（基教）殿、贈左（勘解由小路兼綱）相府御譲与各所内也、

◆『綱光公暦記』自文明八年九月十日至十七日（通期展示）

## 文明八年（一四七六）九月十七日条

十七日、丁巳、晴、今日北小路禅尼（故唯称院母、御台所方同腹也、俗性医師也）叙品事、先日御参内之時、御台御方別被執奏申間、不可有子細由有勅答、然者相尋日次、可申沙汰由蒙仰間、相尋在盛卿之処、可為今日云々、御名字事、予可相計由被仰之間、先度三勧進畢、勘文書様以家記加清書者也、可為苗（ミツ）子之由治定了、凡出家以後女房叙品事、其例不詳、入道親王叙品并女院准后等例、可被准拠歟由申入了、然故南面二品事（嘉吉二）、故勝智院殿被執奏申云々、可

為近例也、是勝定院殿妾也、徳大寺也、猶委可尋記、将又勝智院殿一品事、御出家以後云々、位記持参事、可為北小路殿歟由伺申入之処、未無中門、不可然歟、不苦者、只就御執奏、可進御台御方事如何由被仰之間、不可有難由申入間、持参室町殿、於中門（南面小御所）妻戸几帳下、侍従永康（狩衣）、取位記進之（大内記候西縁）、女房（民部卿局）取之、進御台御方云々、位記筥入沙金一裹被返下、永康取之、返賜大内記、、、、取之退出、不及副使、其後参御末、今日儀珍重之由申入退出、三位殿被参之間、直賀申入者也、即被進位記云々、予可読之由承間読進了、婦人所厚子孫連珠之由載文章、一位殿御成就可載条可然歟、追而可読加也、人々参賀御台御方云々、三位殿者即被参内裏者畏申云々、及晩御台御方、宰相中将殿、小河殿渡御、予参北小路殿賀申者也、侍従政賢以勾当内侍畏申者也、

孝

惟

苗

権大納言綱光

以高檀紙一枚書之、無裏懸紙、所守家記也（北政所御名、字勧進例也）

## ◆『兼顕卿記』自文明九年五月三十日至十二月二十八日（通期展示）

### 文明九年（一四七七）十一月十一日～十四日条

十一日、乙亥、晴、依召参御台御方、以北小路禅尼被仰下云、侍従政資アケマユノ祝、来十六日分也、於御台御前、殊更致沙汰度由、青侍等雖執申、予申入者可有御沙汰由仰也、不可告歟由御尋之間、此祝内儀也、政資事不可比他人、旁可然由令言上之間、御治定也、大内水牛入来当陣、及黄昏引進上小河殿、諸人動門前成市者也、此間大内退散、仍敵陣之輩土岐・畠山左兵衛佐以下悉以没落、今出河前大納言殿同御没落、仍諸陣■或自焼或放火、悉以焼払了、天下泰平之基、洛中已静謐之儀、所致聖運武運也。尤可悦々々、珍重々々、

十二日、丙子、晴、早旦、依召参小河殿、御台御方被仰下云、昨夜之儀天下泰平之初、尤珍重也、殊土御門皇居無為之儀、自最初被仰合大内間、不及焼失条々、一段之大慶也、叡心定而同前候歟、仍内裏驚固〔警固〕事、被仰付諸大名者也、雖然堂上輩両三人可被

召置之由、参　禁裏可申入由、奉仰参内、申入民部卿処当時堂上輩、参祗之事難叶間、
被検知被渡驚固武士候者、可然由御申也、仍勧修寺大納言・源大納言・予三人依室町殿
之仰為検知参土御門殿、自禁裏按察卿同被相副。大外記・前官務以下同参祗、御帳以下
少々令検知、及晩帰参室町殿申入事之由、後帰家、同参内、
十三日、丁丑、晴、自室町殿為御使布施弾正大夫・飯尾大和守両人入来、内裏御留守事重
而驚固武士申請之間、可被召置由、御執　奏之分可申入由也、此段昨日已事旧了、定而
同篇之一勅答勿論也、雖然、致奏聞重而可申入由申入者也、仍参　内奏聞之処、昨日之
勅答同篇也、以使者申遣両奉行許者也、参小河殿小時帰家、自東福寺永明院住持之西堂
以下僧衆四五人賀来、世上静謐之儀珍重由被賀之、被随身賀酒、仍勧一盃、院領事以吉
日如元可寄附由、令申者也、
十四日、戊寅、晴、先公御月忌也、行蔵庵以下僧衆両三輩入来、町中納言・大外記等同入
来、早旦、先参御台御於常御所南都注進以下雑訴之条々数ケ条披露之、委注他記、於御
前被下一盃、頃之帰家、午天又参候、太閤被申上事以下条々又伺申、於当御所直ニ申入
者也、自禁裏被申御抄物等事、同披露。住吉社御法楽寄書、同被進之、仍持参於新造之
御座敷、被下御酒、准后同御座終日祗候、万端披露之後、入夜帰家、此後参　内、依奏
事也、

◆『兼顕卿記』自文明十年七月一日至同月二十九日（前期展示）

文明十年七月二十四日条（一四七八）

廿四日、甲申、晴、午天夕立、雷鳴、・地蔵菩薩縁日也、祈念者也、午天参
小河（足利義政）殿、当国五分一事、御左右催促之処、此儀誠
守護連々望申了、但御許容之有否、可為如何
様哉、可計申由、御談合伊勢（伊勢貞宗）守之処、其後
不申入是非間、一定之儀無御存知間、可　相尋伊勢
守、就返答重而可申入由、御返事也、然者（アキママ）

事歟、弥曲事也、凡寺社本所領五分一被懸召之
者、公家至此時太略滅忘之基也、政道已断
絶、尤可歎々々、為之如何、莫言々々、自
花頂（教助）有使者、　附弟（政尊）一条禅閤御息　室町殿（足利義政）　御猶子事
申沙汰可為祝着由也、自実相（増運）院殿有御使、
可
同御附弟陽明右府御息子申沙汰由也、共以令存
知由返答、及晩自小河殿帰宅、
自　禁裏　忠富（白川）卿奉書到来、善勝寺長者并
小番事等也、件奉書続左、
善勝寺長者之事、可為
房（西川）任卿之由、令御心得渡給候、
目出度候、
一、小番　□（之）　事、西園寺（実遠）　息（公藤）　其
後不被申是非候之条、
如何候哉、尚以可被仰遣之
由候、
一、在（唐橋）綱卿前々存知事候、既
勅免之上者、可被召加
小番之由、同其沙汰候也、旁
期面拝候、恐々謹言、
七月廿四日　　忠富
（切封ウハ書）
「広橋殿　　忠富」

◆『兼顕卿記』自文明十一年正月一日至同月二十日（後期展示）

文明十一年正月十九日条（一四七九）

十九日、丙子、或晴或雪、午半刻許着衣冠参　内、

御台（日野富子）御方・室町殿（足利義政）御参　内故也、先之既御参御直廬、仍

参御直廬方、小時御参御前、予勤申次如毎度、三献

室町殿御酌也、近臣以下祗候輩悉巡流也、三献以後

伏見殿（邦高親王）・若宮（勝仁親王）御方御出座、御比丘尼御所々々・二宮（尊敦親王）等同御

参、仍雖無指事、宰相中将（足利義尚）殿有御参可被悦思召由、

為勅使可参申由、以典侍（広橋顕子）殿局被仰下、奉仰則参

宰相中将殿・申入（以女中）　勅定之趣之処、仰之旨先以畏

存候、仍尤可有御祗候之処、一両日聊御風気之間、

難有御参、得其意可　奏聞之由、御返事也、帰参

禁省、以典侍殿申入御返事之趣者也、万松軒（宗山等貴）御喝食

御所同依召有御参、終日終夜大飲御酒也、鶏鳴

両三度之後御退出、於御直廬又典侍殿局為申沙汰

参御盃、仍天曙程還御、例式　乱舞・微声等如恒、

公武時宜快然也、尤以珍重々々、今日御参　内

之儀、御台御方当年未御参間、自　禁裏御

沙汰也、仍奈良酒一荷進上・女房奉書如此、（禁裏、）

「（端裏銘）文明十一　正　十九」

文のやうひろうし候、おほしめし

候ハす御たるまいり候、ことに御ようゐも

（返シ書）候ハ　ぬゐ中とて、よろこひ

（上）お　ほしめし候よし、
よく申とて候、いかやうにも
御やうしやう候て、とく御しこう候へく候と
をなしく申とて候、かしこ、
「御返事」（切封ウワ書）

◆『守光公記』自永正九年正月五日至六月十五日（前期展示）

永正九年四月十二日条（一五一二）

（前略）濃州段銭事、摂津守（摂津政親）取次者也、如此申出文可申云々、則申出之遣者也、
ミのゝくに御しよくゐたんせんの事、御けちをなされ候へきよし、
めてたくおほしめし候、こそさんしやううけ文をいたし、かたく
申さため候事にて候へハ、そのすちめちかひ候はぬやうに、御下知を
めししかけられ候やうに、まさ（政）朝臣に申さたし候へとよく〳〵
申され候へくよし申せとて候、
ひろハし中納言（守光）殿

就濃州段銭事、女房奉書如斯候、可被計申沙汰候也、
恐々謹言、
四月十二日　　守光
摂津守殿

◆『守光公記』自永正九年六月十六日至十二月二十八日（前期展示）

永正九年六月三十日条

卅日、壬申、晴、及民（昏）色室町□（殿）□御輪［　　］、
主（足利義尹）人御出座、（中略）
余（守光）南面先々雑簀子、其後立八足、（中略）次御莚□
自庭上伝余請取之、敷御前、次伝贖之、仰儀如前、
（次悪秡上八足次〇寄懸御輪、）

取之、置御前則退、則進撒之、（内々可令散々、米給被申入）令散々
米給後撒之、其後（土御門）在宣卿進八足前（南面）、読□（被詞カ）□、
小時読畢、秡令持参簀子与余、同自地上伝御輪
取添之、令（持参）〇御前置御輪於席上進御秡令取之賜（左御手）、
賜後延御輪（二陪シテ三所以紙拭結之、則解之）奉越者也、先是進御莚
賜、奉三度越（毎度有之、秡歌一首つゝ唱之）、如元二陪押（合）〇而取添御秡退如
元、通与之又進撒御莚、其間退、当代初参之間、以申次（右尹）、
（取）迂太刀、則有御対面、珎重々々、

◆『守光公記』自永正十七年正月一日至十八年三月一日（後期展示）

**永正十七年（一五二〇）十二月二十日条**

廿日、自飯尾近（貞運）江方有使、御服用脚先先五千疋分
可被進候、御請取可持下之由申、則此子細申（長橋局東坊城松子）長橋、景（藤堂）元ニ相
添請取（伊勢国）栗真等遣近江許者、

請取申　要脚事

合五十貫者

右為　禁裏様御服用脚、且所請取如件、

永正十七年十二月廿日　（広橋家雑掌）景元　判

直遣長橋之処、如此右（長橋局官女）京大夫折紙有之、扇代
五十疋被下（藤堂景元）因幡者也、

御ふくの御物、かつ五千疋まいり候、めてたく候、
たしかにうけとり候へく候、かしく、

◆『守光公記』自永正十二年正月一日至十月一日（後期展示）

**永正十二年閏二月十四日条**

（前略）就酒麹事諏（長俊）訪方方遣状如此、
酒麹役　朝要分事、右（細川高国）京大夫中間・小者等難渋之儀、為　禁裏

度々就被仰出候、去年御成敗之時、既申付之旨被御返事申了、今
不及沙汰候、所詮可被申付之由、堅被仰出候様、預申沙汰候者、可為祝着候、
巨細定自本司分可申候、申候也、謹言、

後二月十三日　　守光

諏方左近大夫（長俊）殿

# 第二章　広橋家の〈公務〉と生活

◆『頼資卿記（カ）』自寛喜元年九月十一日至十四日（通期展示）

**寛喜元年九月十三日条**（一二二九）

予秉燭以前参陣、依仗議也、先有官奏、
大臣帰座陣被下文、此後召官人被召文書、是神部与祇園所司闘諍
事也、土御門大中納言（源定通・通方）・左大弁（藤原家光）元来在座、按察（藤原兼宗）・予（藤原頼資）・
平（経高）相公・右大弁（平範輔）同
「（首付）此間大臣宣云、硯可召、左大弁仰史、々」
著、大臣被下文書於按察、々々披覧一通之後、下土御門大納言、其
「（首付）持参置両大弁中央前、自後置之也、」
以下不及披覧、次第取下之、至右大弁披覧、取笏候、大臣云、可
読申、先神宮奏状、次祇園所司申状、次使庁実検文、次法家
勘状、自引本条文之所、可読申之由有上宣、右大弁召史令直
掌灯、次令読申、平メテ持之、垂面天令読如何、持上文天、
当面透火可読也、其声色常也、聊可有気色歟、又神宮奏状
随読巻重天可読、而繆持天令読如何、読了、如元結文書
取笏候、大臣宣云、可定申、但法家之罪状無左右出来、是非勅定之
趣、令法家勘申例之由候、存知之処職事頭卿歟、誤宣下
罪状之由、然者法家勘申罪状トハ不可申、只闘諍如何
様可有沙汰哉之由可定申、但其次法家勘状之事有難者、可有

其沙汰者、右大弁退足定申云、豊受大神宮役夫工催神部与
祇園執行法眼晴円闘諍事云々、次左大弁（ママ）取　条様同上、次平
宰相同、但同右大弁平朝臣定申、此外無詞、雑言之時雖有弁舌、
如此仗議以下有事之日、一切不弁申、当時相公中有才学之
由自称、然而泥々也、不便々々、不足廊廟之器、為之如何、次
予、次土御門中納言、次大納言退足定申、、此亜相定申之趣、太以優
美也、可貴々々、法家之勘状違乱事、同右大弁平朝臣定申、
神宮事、沙汰之趣可異他之子細、同権中納言藤原（実基）朝臣定申云々、
其上引先例被定申之趣、神妙々々、次按察、其声一切
不入耳、只聊唇之動歟如何、次左大臣、其詞不聞及、只適
高声事頗似雑言、莫言々々、次大臣気色左大弁可書

◆『兼仲卿記』自正応二年九月一日至十月三十日（通期展示）

正応二年十月二十一日条（一二八九）

廿一日　丁卯　晴、参殿下、申勧学院吉書、院雑色入筥持参、予
持参御前、御覧了被返下、著障子上、加下書可成返抄也、返抄
成上之間、加判畢、次書下長者宣、於寺家社家長者宣、院
家成上下文。各加判、下賜院雑色了

可成返抄

吉書　　別当左中弁藤原兼仲奉

瀧野御庄官等解申進上　御年貢米事

合佰弐拾参斛伍斗者

右当年御年貢米内、且進上如件、以解

正応二年十月廿一日

御庄官等上

返抄

勧学院政所返抄

検納米佰弐拾参斛伍斗事

右瀧野庄当年御年貢米内、且検納如件、故返抄

正応二年十月廿一日　知院事高橋

別当左中弁藤原朝臣在判

長者宣被下寺家

被　長者宣稱、寺中恒例吉事、任先規可

勤行之由、宜仰遣者、　長者宣如此、悉之、謹状

正応二年十月廿一日　左中弁兼仲奉

謹上　興福寺別当僧正御房

◆『義満公任槐召仰儀并大饗雑事定書』（通期展示）

無先例歟、帰里第、行次第之儀、家司頼房・

職事大膳大夫行冬（藤原）自陽明被召進之、今夜前駆四人也、其内也、・所司左衛門尉藤

親孝同仰所望、自陽明被召進、賜賜小訪云々、、三献如例、主人酌藤右少弁

知輔（安居院）云々、顕職順流分也、知輔補家司云々、陰陽師

権天文博士安陪有世云々、同有茂有世猶子也、実父者前陰陽頭泰宣也、、

有世猶子歟　勘日時載勘文云々、以伺申之、有例歟、、二人之時、多者両家相

重歟、一■紙歟帋之条、未見及、現前父子哉、可謂傍若

無人歟、但若有先規歟、可勘決、家司頼房書

大饗雑事定文、見在座諸方歟卿如例云々、（広橋仲光）都督

半夜帰来、委細定記之歟

大饗雑事

行事

（藤原宗茂）

前修理権大夫（源惟教）朝臣　　前右京権大夫朝臣

右中弁朝臣（九条氏房）　良賢真人（清原）
兼長朝臣（甘露寺）　頼房（万里小路）
知輔朝臣（安居院）　資国朝臣（日野西）
資藤朝臣（日野町）　兼宣朝臣（広橋）
知兼朝臣（安居院）　重光朝臣（日野裏松）
経豊朝臣（勧修寺）

◆『経嗣公記抄』自応永十四年正月一日至三月二十九日（通期展示）

応永十四年正月四日条（一四〇七）

四日、己未、晴、（中略）「其後藤（広橋兼宣）中納言来直衣、於内出居謁之、示云、今朝参賀北山殿（足利義満）、御対面、被仰云、（康子、十二月二十七日准三后宣下）国母准后事、今春祝詞不」可過之、天之所與也、自愛無極云々、凡快然儀珍重也、就其旧冬晦日早旦参仕之時、被仰云、平相国（清盛）」禅門室家八条二位（平時子）者不及准后宣下歟、尤不審、平家ニモ只八条二位ト所語也、如何云々、其事之由」答申了、此事倩廻愚案、平相国夫婦共以蒙准三宮宣旨之条勿論也、然而只作惘然不」申入其旨、且件日坊城大納言（俊任）参会之間、密談云、彼二品為准后事、相構不可被申出者」、彼卿得其意之由承諾了、凡平家例雖事異、若自然相当不快之様被思食咎も不可然歟」、乍御存知如此被仰歟、又真実無御存知歟、不審相貽者也、所詮被違彼例条可宜歟、然者准后」被叙一位之条、如何、予云、此宣下以後不可有其儀、先夜先被叙一品之条可然事也、而物忿之間、自他不」思寄過了、為之如何、藤中納言云、於于今者、可有院号歟、予云、北山殿尊号事先有沙汰者、次第儀」叶理歟、雖何篇、違彼例条、可然云々、重事也、猶可廻思案之由相談了、委細不可記盡也、

◆『応安四年三月六日兼綱公譲状草』（通期展示）（一三七一）

一、鷹司殿御恩地等事

讃岐国井原庄半分　美濃国上有智北方内各別名

但馬国小代庄内輔遠名、

猪熊殿并金蓮花院等跡敷地事於小庵者私領也、

洞々殿御地内在所丈数見文書、

以上急可申給安堵御教書、数代家礼跡也、

殊存旧好、不可存疎略者也、

（中略）

右条々随案出、任筆注（為後鑑）之、近日老病

相侵、餘喘不知旦暮之故也

抑典侍（広橋仲子）殿者、竹園（緒仁王）御佳運定在近歟、凡

面々定被開分々御運歟、家門之繁榮

只可在此時、家門事毎事申談、可随御

計、善俊房扶持事、衣鉢資縁并

■■■扶持無下■■■者難治歟、

（播磨国高岡南荘）高岡　得分内■■疋、此外中御門京極地并三条京極

地■■■■雖取集猶不可足、■■■■■■

不足者、以高岡内可被満数、當時扶持懇志之旨、

殆超予憐愍歟、雖心安、故為表微志所

注加也、善俊房一期之後者、可付家門、

所領等事、為無不審、大概馳筆、

難讀解歟、追可清書者也

応安四年三月六日　（藤原兼綱）（花押）

◆『制誡』（通期展示）

奥書

（一三五一）観応二年黄鐘八日」令書写之、

前黄門（藤原光業）（花押）

◆『崇賢門院叙位除目申文案』（通期展示）

## 明徳二年正月十三日付崇賢門院御給申文案（一三九一）

崇賢門院

正六位上藤原朝臣快子

望女爵

右当年御給女爵所請如件

明徳二年正月十三日　別当蔵人右中辨正五位上藤原朝臣兼宣

## ◆『兼宣公記』自応永十年二月一日至六月二十一日（通期展示）

### 応永十年二月十一日条（一四〇三）

十一日、風雨、（兼宣母・細川頼之女老堂）被招請申上臈之御寮

間、午剋許、参（崇賢門院仲子女院）御所、（兼宣弟）兼俊朝臣・（兼宣息）定光・

（兼宣息）資光等参入、遍照光院・（周鳳・兼宣弟）鳳蔵主等参会、

元祐房於（細川頼之養子義之）讃岐入道宿所大（ママ）盤若轉読

間、依指合不参云々、數献後、予以下退出、

抑（足利義満女子聖久）御喝食御所渡御此席、（義満正室日野康子）寝殿又可有

御渡之間、予以下早々退出、老堂御盃代

千疋被進寝殿、予致沙汰了

## ◆『兼宣公記』自応永三十四年四月十四日至八月二十八日（通期展示）

### 応永三十四年五月二十日条（一四二七）

廿日、雨下、自午剋許、御称名念仏無怠御坐

■■■（萬人カ）■奉称美、申半剋、遂御入滅云々、無

■■■眼、可哀可悲、当家之光華者依■■

■■（女カ）院御大幸事也、懐旧之涙難窮者也

■折節之所労、一向見証御作善事之条、生

前之為恨為之如何、（広橋宣光）相公退出相語云、廬山寺竹

中照珎上人為御知識、自昨日参候給、奉勧御念

佛云々、日比者可被召浄花院長老等凞上人於御

■■■雖被定俄有子細、照珎上人被参者也■■

■■■八十九、当今主（称光）上者御彦、（後小松）上皇者御孫子

■■案先蹤、御（藤原道長）堂殿御息女上（藤原彰子）東門院者一条

院后、後一条院・朱（ママ・御母）雀御祖母（後略）

◆『口宣案并消息』（通期展示）

明応九年（一五〇〇）十二月十日付後土御門天皇口宣

明応九年十二月十日　宣旨

従五位下藤原守子

宜叙従五位上

菅原松子

藤原継子

以上、宜叙従五位下

蔵人頭左中弁藤原守光

◆『後花園院三十三回聖忌曼荼羅供雑事文書』（通期展示）

文亀二（一五〇二）年十一月十八日　守光（広橋）　奏「（異筆、以下同）中山大納□（言）」

曼荼羅供条々

日次事

「仰　可為十二月十九日、」

於何在所可被行哉事

「仰　可為安祥寺殿、」

着座公卿御点事

「仰　重可被仰下、」

堂童子御布施取殿上人御点（事）□

「仰　同前、」

御願文作者事

「仰　可為　章（高辻）長　臣、」

文亀二年十一月　　日守光　奏

曼荼羅供條々

日次事

於何在所可被行哉事

着座公卿御点事

堂童子御布施取殿上人御点事御

御願文并諷誦作者事

◆『経嗣公記抄』自永徳三年正月一日至三月二十九日（通期展示）

永徳三年（一三八三）正月一日～十三日条

永徳三年

正月

一日、乙巳、終日雨下、早旦酌屠蘇白散、（主上カ）ゝゝ御薬小朝拝節会以下被行之、

（後円融上皇）新院御薬并拝礼以下」元正之儀一切被停止、希代珍事也、自旧年有子細如

此、莫言々々、伝聞、摂（二条良基）政家無拝礼（其所無便、宜之故云々）、秉燭之時分令」参内給、先外記覧

叙位勘文、摂政出坐客亭、束帯（無著座公卿云々）、則（源）氏（去夜為前駈予所召進也、先規大略以家司被召歟、如何）、奉仰召外

記、々々参進入」筥覧之、次御（後小松天皇）参内、如恒云々、後聞、小朝拝節会及半更被行

之、甚雨之間、可為雨儀歟之由有沙汰之間、雨脚忽休、雖」地湿、遂以晴儀被行云々、

奉行家房未練珍事云々、無立楽云々、如何々々、

公卿、後日相尋記之、

左大臣（足利義満）内弁、右大臣（近衛兼嗣）、久我大納言（具通）、新大納言（日野土御門保光）中、侍従大納言（三条西公時）、

万里少路中納言（嗣房）、按察中ゝゝ（日野裏松資康）、一条中ゝゝ（公勝）、日野中ゝゝ（日野東洞院資教）、

御酒勅史　　宣命史―

中御門宰相（宣方）、中山宰相中将（親雅）、　左大弁宰相（坊城俊任）、右大弁宰相（勧修寺経重）、正親町宰相中将（公仲）

少納言、淳（菅原）嗣朝臣、　弁、知（安居院）輔、

左、季（月輪）尹朝臣、公（一条）邦、

次将、

右、教（山科）冬朝臣、教（山科）遠朝臣、　実（正親町三条）豊朝臣、　教（山科）清、

抑新院与武（足利義満）家間以外也、旧冬廿九日貢馬并元三要脚以下雖沙汰進之、称御違例之由悉被返遣、所」詮御生涯一途被思食定之由被仰遣、雖然武家強又不被驚動、仍貢馬引進禁裏、要脚以下重不能」進者、随而院中下格子閉門給如離宮云々、仙洞治政之始、如此事定無先規歟、凡非言詞之所覃耳、」

二日、丙午、晴、有殿上淵酔、左府内々参内云々、」

三日、丁未、晴、兼（小槻）治来、召前問節会事、」

四日、戊申、晴陰不定、良（清原）賢来、予謁之、語云、常磐（満仁）井親王元日節会可被出仕之由武家責催之、然而依為」俄事全不叶、仍白馬踏哥之間可被構参云々、近代無此儀、毎事帰淳素、可謂珍重歟、

五日、己酉、陰、叙位儀、今日雖為幼主御衰日猶被行之、明日悪日之間如此、延久寛元例云々、執筆　右大弁宰相、」摂政令坐簾中給、寛元又如此、円明寺（一条実経）殿著布袴給也、今度之儀可尋記、

六日、庚戌、晴、見聞書、無殊事歟、臨時尻付略之、府労尻付同無之、如旧冬叙位、此事先度予述所存了、」院宮御給尻付不一様、尤不審也、後聞、外記聞書々誤云々、可尋之、

七日、辛亥、晴、白馬節会、公卿済々、左大臣内弁、叙位宣命史侍従中納言、御酒勅史中御門宰相、例宣命使」正親町宰相中将、禄所左大弁宰相、伝聞、内弁為奏叙位宣命進弓場代之時、外弁公卿以下悉致礼、大略」蹲居、右大臣、内大（徳大寺実時）臣　立座前気色云々、

公卿

左大臣、右大臣、内大臣、今出川大納（実直）言、西園寺大ゝゝ（公永）、九条大ゝゝ（教嗣）、新大ゝゝ、大炊御門大ゝゝ（冬宗）、花山院大ゝゝ（通定）、」侍従中ゝゝ、万里小路中ゝゝ、按察中ゝゝ、二条中ゝゝ（御子左為重）、日野中ゝゝ、中御門宰ゝ、中山宰相中将、左大弁ゝゝ、右大弁ゝゝ、正親町宰相中将、

少納言、秀長朝臣（東坊城）、　弁、家房、

左、季尹朝臣、　為衡（御子左）朝臣、　実種（八条）朝臣、　公邦、

次将、

右、教遠朝臣、　実豊朝臣、　隆信（油小路）朝臣、　実量（裏辻）朝臣、　教清、

後聞、九条大納言、右大弁宰相立叙列、此外式兵叙人不立之云々、九条大納言不著外弁座直立叙列、」

或説云、欲被著外弁之処、新大納言示子細留之云々、今度雖被超越、不取位記以前可為本位之間如」此歟、委細追可尋記也、今日又無立楽、楽人等申訴（訟）詔違乱之間如此云々、又国栖奉行外記師香（中原）」催落云々、不足言事也、」

八日、壬子、中御門宰相又来談云、親王（常磐井宮満仁）十六日可有出仕云々、此事武家有所存責伏、気色以外不快、珍事也、」是又有子細云々、仍此間家礼人々皆以止家礼、又今度出仕作法以下、可預御扶持之由被申摂政、々々被伺」武家景勢之処不可然云々、仍被辞退了云々、」

十三日、丁巳、晴、十六日節会奉行頭左中弁資衡（日野柳原）也、而未練有若亡之間、臨期可事闕、

（左端書）　町殿（日野町広光）　教秀（勧修寺教秀）」

可被改之由武家」被申摂政、仍被改仰頼房（万里小路）云々、為顕職不便事也、頼房又非聖目歟、然而厳親舎兄扶持之間無」子細歟、末代職事此時至極也、可悲々々、

## ◆『年号勘文部類自延文度至文正度』（通期展示）

後光厳院

文和四（一三五五）　延文五（一三六〇）　康安一（一三六一）　貞治六（一三六七）　応安四（一三七一）

文和五年三月廿八日、改元為延文、

勘申年号事

初度

貞徳

周易注疏云、亨之与貞、其徳持行、若元之与利、

文安

晋書云、尊文安漢社稷、

右、依　宣旨勘申如件、

造東大寺長官参議大蔵卿兼左大弁阿波権守藤原朝臣（勘解由小路）兼綱

勘申年号事

初度

延文

漢書云、延文学儒者数百人、

元宝

三元布経云、盛以自然雲錦嚢、対以三元宝神之章、

右、依　宣旨勘申如件、

蔵人防鴨河使左少弁兼文章博士越中介藤原朝臣忠（柳原）（光）

◆『基定卿書状　外三十通』（前期展示）

（文明十四年）（一四八二）正月二十四日付壬生晴富書状

尚々、松明事早々可加

下知候、降雨候者可延引事、

同得其意候、返々建暦

（上）宸　記懸御目

度候、随身候て

参申度心中候、

御（行間）使　急候間馳筆候、

恐存候々々、

御慶雖事旧候、猶更以不
可有尽期候、必々近日以参賀
重畳祝詞可申述候、来月
七日白馬御習礼（担当奉行日野町広光）事、珍重々々
存候、如仰　朝家再興之
基、何事可如之候哉、真実々々
天下惣別大慶候、松明事
可加下知候、当時小野供御人
毎端緩怠、無是非事共候、
其子細過高察候哉、御習礼事、
近代不見及候、　後鳥羽院御宇
御習礼候、於　大内被行候、内弁
外弁等共令勤御候、其外諸公事
□（御カ）習礼候、此時　宸筆御記
□（下賜カ）□安置官庫候、嚢祖　国（小槻）宗
子息　通（小槻）時　重代者也、仍召加之奉仕
御装束之由、被遊載候、其後
後（二条良基）福光園准后末代重宝官
庫之規模之由、被載御奥書候、
於家無双文書候、不出閾候、過
高察候、返々一向不能出頭候間、今春
未参賀仕候、旁必一日可参言上候
旨挿心底候、只今高問祝着与畏
悦相半候、晴富（壬生）恐惶謹言、
（文明十四年）正月廿四日　晴富上

（切封ウハ書）　晴富上」

（貼紙）
「晴富宿禰状　白馬節会後鳥羽院
御習礼外弁等共令勤御、其外諸公
習礼御記下賜安置事、又奥書御
事、　」

◆『菅大府記　改元部』（後期展示）

本云、
以故坊城大二品（菅原為長）御自筆書写之了、
左京大夫菅長貞
明応十年辛酉、二月廿九日、以彼自筆之本（東坊城和長卿本）、」書写之畢、今夜有改元之事、予為
翰林」勘進年号字初度也、仍彼卿毎事商量」之条、編御記年号一巻許拝見了、不堪感」
悦者也、不可出閫外矣、」
従四位上行少納言兼侍従文章博士式部少輔菅原朝臣章長（高辻）
（高辻）
菅大府記一巻改元部借請」柱下長雅朝臣、書写了、尤為」秘記、可謂自愛々々、更可」禁
外見者也、」
天文元年（一五三二）八月廿八日
鶴首左蘭臺藤原（広橋兼秀）（花押）

# 第三章　朝廷財政と幕府

◆『後柏原院践祚御訪方註進』（通期展示）

「（端書）
践祚御訪方事」
注進分可有用捨事
践祚御訪方事
（中原）

大外記（今度師親可参除之、）　三百疋
時元（小槻）宿祢　三百疋

六位外記五人　康貞（中原）　二百五十疋　三百疋
六位史五人　康友（中原）　二百五十疋　三百疋
陣官人　五百疋　三百疋
召使久秀　参百疋（百五十疋）　百疋
史生行賢（宗岡）（渡御供奉）　参百疋

官掌
使部
出納両人　四百疋（一人分）　二百疋
小舎人　三百疋　百五十疋
仕人　三百疋　三百疋
南座　二百疋　百疋
主殿官人（両人）　二百疋

## ◆『後土御門院御即位惣用帳』（通期展示）

寛正度大礼伝奏（万前大冬房卿）（万里小路）筆歟、
御即位惣用方与永享相替之問
事条々大概如此、相随諸司等申
状重可申入分連々之間友且注申也

一、由奉幣今度可有行幸永享分ニテハ
可不足事、
万千（永享）六百四十疋　万九千（応永）四百三十疋（増分七千九百疋）

一、蔵人方調方調□(進)今度応永度ヨリ相廻分申之

弐万(永享)三千五百五十疋

弐万(応永)五千疋増分千四百五十疋歟

## ◆『即位第一』三十三・三十四丁（通期展示）

「国分事」

（一五〇一）

御即位要脚諸国段銭国分文亀元　六　廿五

加州　丹波　丹後　美濃(信)　尾張　越後

淡路　越前

松丹州　摂津　河内　遠江　若狭　備(并)前

因幡　近江

松豊　讃岐　播磨　美濃　但馬

伯耆　備前　能登

## ◆『即位下行帳　第四』三丁（通期展示）

（一五〇一）文亀元之儀、

御即位下行帳自伝奏大宰権帥広光卿、於惣奉行『摂津』被遣切符也、

八月廿三日但馬国段銭参千疋到来内、

百疋大橋且分　内侍所供神物　廿四日

五百疋同且　御束帯御服料（言国）　同日

千疋同且　内蔵寮　山科黄門　下行

官調進物内下行　同日

行事官　行賢（宗岡）　請取之

七百疋同且　官方行事所始〇高御座等并　同日

予請取之（小槻時元）

三百疋同且　褰帳典侍御訪　同日、広橋局

四百疋且同　　劔璽内侍装束方同日

已上三千疋

◆『永正度御即位料足請取』（五～七通目は後期展示、十～十二通目は前期展示）

（五通目）

請取申叙位御訪事、

合三十疋ハ

右請取申所如件、

永正十八年（一五二一）三月十七日　　伴清方主殿大夫（花押）

速水掃部助殿

（六通目）

請取申御脂燭掌灯御下行之事、

合五十疋

右為御即位御下行所請取

申如件、

永正十八年三月十七日　　常弘御蔵（花押）

（七通目）

御即位参勤料

内参百疋且請

取之也、

永正十八三月十七日　　業賢（清原）

藤堂殿

（十通目）

請取申　御要脚之事、
　合壱貫文者
右為　御即位御訪所取下之
如件、
　三月廿三日　　供御所大隅守有（花押）
　藤堂因幡守殿

（十一通目）
請取申　料足之事、
　合壱貫文者
右為御即位高御座覆物青打
絹網料所請取申如件、
　永正十八年三月廿六日　　行事官（宗岡）行賢（花押）

（十二通目）
請取申　要脚事、
　合百五十疋〈此内五十疋少内記康友（中原）分〉
右叙位方未下分所請取申
如件、
　永正十八年三月廿二日　　師象（中原）（花押）

◆『文明九年小叙位方切符』

（文明九年（一四七七））十二月二十日付広橋綱光書状案（前期展示）

御昇進方惣用之内、二百疋陣座
畳、五百疋陣作事方、以上七百疋
可被下行候也、恐々謹言
　十二月廿日　　御判（広橋綱光）

飯尾加賀守（為信）殿
飯尾隼人佑（任式）殿

（文明九年）十二月二十七日付広橋綱光書状案（後期展示）

外記図書持参禄事、就困窮
出仕難事行候、向後別紙遣切符
早々可被下行候也、恐々謹言、
十二月廿七日　綱一（光）
飯尾加賀守（為信）殿
飯尾隼人佑（任式）殿

◆『御即位下行帳 越前 永正八』（通期展示）

（永正八年）三月二日付摂津政親書状案（前期展示）

御即位要脚越前国反銭正実所納内百五十疋、
為行事所始、可被下行候也、恐惶謹言、
三月二日　政親（摂津）　判
松田丹後守（長秀）殿

◆『慶長十六年御即位雑用一式帳』

（慶長十六年）五月二十日付かうあみ藤十郎請取状案（前期展示）

御蒔書
一、御はんさう（半挿角盥）つのたらい　代金子六両
　　惣こいなし（濃梨子）地つふきくた（粒菊）かまき（高蒔）
　　ゑ（絵）内もこいなしち但下地金物まて
一、御なてものひろふた（撫物広蓋）　代三両三分
　　但くろ地に菊かう（香）草ひたゝと
合九両三分
此米弐拾五石八斗三升五勺　但金子一枚付にて

銀子五百卅目つゝ、
米壱匁ニ付五升つゝ、
かうあみ　藤十郎

慶長十六　五月廿日
板倉伊賀守（勝重）殿

（慶長十六年）九月二十二日付ぬしや又八郎請取状案（後期展示）

御ぬり（塗）物
一、弐石　御狗の御はんさうつ（半挿）のたらい（角盥）
　　惣ニ布き也上之ぬり不地共ニ
一、八斗　御なて（撫）物之ふた（蓋）
一、八拾石　たか（高）御くら（座）生覆ノ香炉
　　台二ツ御おこ木　本
　合八拾二石八斗
右米慥請取申候
九月廿二日　ぬしや又八郎
板倉伊賀守（勝重）殿

# 第四章　広橋家の資料の可能性

◆『貞応二年二月主殿寮下文　外二十三通除目』（通期展示）

永徳二年（一三八二）柿御園山上郷用水沙汰記録

柿御園山上郷用水沙汰記録永徳二壬戌始之、
御園三ヶ郷堺并山上郷用水、多年以守護権威・当時
禅僧権勢、市原村土民等及押領之間、或経　上裁、或対守護
連年依致訴詔、雖被成下　綸旨・奉書并守護等施行、
猶以不及承引、弥令倍増之間、山上郷百姓等　遂（逐）　年令窮

堀、不堪愁訴、縦雖為一段、如元取用水、可達多年之
本望之旨、朝夕念願之間、于時就被補預所職、申談本所
奉行左京権大夫行冬、先整目安、申成本所御安堵
勅裁了

近衛前関白(道嗣)家雑掌申
欲被停止市原村土民等非分押領、如元全御園三ヶ郷堺并
山上郷用水知行事、
右、市原村土民等、恣以守護権威、打入柿御園三ヶ郷堺、落取山上郷
用水之間、就無盡期、連々依及訴詔、雖被成下　綸旨・御教書
并守護之施行等、案文備右、守護方引汲敵方之間、不及成敗、徒
送旬月條、難堪之次第也、所詮被止彼等非分押妨、如元本所
御施行可被全之旨、被成下御安堵　勅裁者、弥仰善政、増為奉
耀被謂御下知、粗目安之状如件、

永徳元年十二月

## 至徳元年十一月八日付良全書状写（一三八四）

申候、なに事もまいり候て、くわしく申入候へく候、　（
あなかしく、
至徳元
十一月八日　　良全判
西明房御房

市原返事雖為如此、公方御沙汰落居之間、同九日登
井口和南山、松一本切之、誘分木、即市原井口スコシ上
レツケツ所上程ニ懸分木畢、
同日六打程、自市原寄来、即切捨分木、不可用之由立
使者於和南云々、

後日出京之時、此子細載目安、申奉行畢、

**応永十年（一四〇三）六月十四日付室町幕府御教書写**

近衛殿政所申近江国柿御園内山上郷用水事、
有其沙汰中分之処、市原庄土民等不随度々
成敗、一円押領之間、重施行畢、尚以相支云々、
太招罪科歟、所詮至彼用水者、任先度施
行之旨、半分充可被沙汰付、若猶不承引者、
任法可被致其沙汰之由所被仰下也、仍執達如件、

応永十年六月十四日　　沙弥在判（徳元）

佐々木民部少輔（京極高光）殿

◆『除目』（紙背文書）（通期展示）

**（天文三年（一五三四））十二月二十日付足利義晴御内書**

東洞院殿（勧修寺藤子）御不例の
よし承候、驚入存候、御
養性かんよふたるへく候、
能々得其意可被申入之
状如件、

十二月廿日　義晴（花押）

広橋頭弁（兼秀）殿

◆『除目執筆記　下』（紙背文書）（通期展示）

**（天文四年（一五三五））六月十九日）足利義晴御内書**

就観音尊像之儀、
被成下勅書候、謹以

拝見之、忝令存之旨、
宜被申入之状如件、
（後欠）

## （大永七年十月）（一五二七）御室覚道法親王書状

当（御室）室　相続之事、任先規
嘉例、二（後奈良天皇第二皇子）宮　御　方　申定度
之由存候、候人等同存此旨候、
時宜可然様可令　奏聞
給候者可目出候、委細以　尊（真光院）海
僧正申候也、謹言、
（後欠）

## ◆『安祥寺文書』（後期展示）

大智院殿（足利義視）御自筆案
護共到来候、懇之儀
喜悦候、弥祈禱事
憑覚候也、

二月九日　　御判

安祥寺（隆快）とのへ

――――――――――（裏花押（光意））――――――――――（紙継目）

武家代々御判之物、未数通所持仕候、
大方写進上候、同者、此時正文雖可
係御目候、路次事之外物忿之間、不能
其義、各正文之儀、令随身必致

参洛可申入候、

永正十六年（一五一九）十一月十四日　大僧都光意（花押）

◆『享禄度改元申沙汰愚記草』（前期展示）

蔵人右中弁正五位上藤原朝臣兼秀（広橋）生年廿三才

大永八年（一五二八）六月廿九日、己巳、晴、自坂本大館伊与（尚氏）入道常興、状到来、改元急可申沙汰之由、室町殿（足利義晴）仰云々者、則以彼状　奏聞之処、不可有別儀云々者、其趣献請文畢、如此之時節予所労殊甚、可謂難儀者哉、自未斜身事又相煩事以外也、為之如何、

卅日、庚午、晴、早旦掃部（速水）大夫正益召下坂本、改元之間之事具為承定也、及晩正益上洛、且二千疋為武家可有進納、以其分可申沙汰、相残千五百疋者重可有下行云々、終日所労以外也、為之如何、

七月一日、辛未、天晴、依所労不出仕、自未斜例式相煩事以外也、及晩自坂本大館入道状到来、改元用脚之事也、如此、

就改元之儀、要脚之事、先日内々蒙仰候趣申入之、以松田丹後（晴秀）守御倉江被仰出候、当時難事行儀不及是非御事候へ共、涯分令調法之由申候、其趣委曲速水方へ申候、相残分者未下にて、追而可有下知（行）候、宜以此旨早被遂其節之様、申御沙汰可目出候、条々可申旨候、其為令啓候、可得御意候、恐々謹言、

七月朔日　　常興判

広橋殿進覧候

◆『天文度改元愚記草』（後期展示）

蔵人頭正四位上行左中弁藤原朝臣兼秀（広橋）生年廿七才

享禄五年（一五三二）七月

十一日、丁巳、天晴、陰陽頭有春（土御門）朝臣入来、昨日従江州上洛云々、殿中之事種々言談、就中改元之事可有御執　奏之由、内々武命云々、是三輪杉有稀有事、享禄六年二月天下侍可相滅云々、件字虫食之所行云々、誠希代之事歟、仍可被行改元之由有其沙汰云々、及晩自江州以大館伊尚氏与入道常興以状被仰下云、改元之事急可令申沙汰云々、是武命也者、則着朝衣参　内、以勾当内侍（姉小路済子）室町殿（足利義晴）御執　奏旨具令　奏聞処、即可参御前云々者、参御前、御三間、先予帥大納言（三条西公条）有御前、改元之事可有如何之由被仰、帥卿申云、武家執　奏之上者不可及異儀、早可有其沙汰、予申云、当月中尤可然歟、大永・享禄共以八月也、近例不庶幾、仰云、誠今月中可有沙汰、無余日之儀如何、予申云、雖無余日在何事哉、勅定云、然者不可有別儀之由可申江州云々、同被仰云、然者則可申沙汰、予申云、享禄度既存知、今度云上首、云未役、可被仰頭弁、（勧修寺尹豊朝臣）万一及闕如者可存知之由申入之、次退出、

十二日、戊午、晴、改元之事、叡慮無相違之旨、以状申入室町殿畢、江州、

## ◆『左大臣某書状』（通期展示）

**奥書**

右、揚名介之事、後成恩寺（一条兼良）殿下御所意如此、雖有請彼御説之輩、只一往之儀歟、此段当家深秘也、雖然御所望依難黙止、并計歴・殊給等申文事、注之所遣也、可被禁外見者乎、

左大臣（一条房通）（花押）

広橋大納言（兼秀）殿

◆『後法性寺殿御抄』（前期展示）

奥書

（藤原兼実）
後法性寺殿御抄也、不可出閫外、
努力々々、

右一巻者、去春愚臣候叙位
執筆之時、（近衛稙家）前殿下太相国自令執
出給被与下、其後不得寸暇移日
時、初冬下旬廿八日巳刻立筆、
申刻終筆、不審字有端多、
任本畢、翌日令持参致返上畢、

（一五四五）
天文十四　十　廿九

亜槐藤兼（広橋）秀　四十才

◆『広光卿書状　外三十九通』

（一五四四）
（天文十三年十二月二十六日）広橋兼秀消息案（前期展示）

仰之趣跪承候畢、元日内弁事、さやうに三（三条西実澄）条大納言をもつて甘露寺大（伊長）納言にかり入たく候つるや、（返シ書）たん　かういたし候へき由（上）申　候ほとに、今朝まかり向て候へは、いま一ハしまつこしやうのとをり申候へと申候つる、練なとの事（裏紙）まて　何やらん申候て、大略さんし候へきやうに候つるまゝ、たゝいまのとをり言上いたし候つる、故障申つめ候よし驚存候、さためて俄何とは子細（裏紙上）出来　と推量仕候、先々叙位執筆の事、内（今出川公彦）府故障につきて、堅仰下され候、忝畏存候、先（上上）上　首にふれられ候へきかとの御事、最前に内々言上仕候ことく、丞相不参のうへにては、当時（下）上　首内　右（徳大寺実通）大将・左（二条晴良）大将・一条（兼冬）大納言なとさんしにおきてハ、更にく其望を申候へき事も、かへりて未練の事にて候、たとい下臈にて候とも、西園寺（公朝）・久（晴通）我　両（裏紙下）大　納言なと参仕候ハゝ、これも沙汰に及候ハぬ御

事にて候、たゝいま上首の内ふれられ候へきは、左大将の御事候や、元日・白馬ともに
御拝賀事行候ハて故障申され候上にて、（中）叙位にいたりて御参候ハんかにて候ハゝ、尤
もよきもなく存候、又上首とて自然甘露寺大納言なとに先おほせられ候へきとの御事
候や、これは家におきて例なき御事にて、その家よりハしめて勤しの時ハ、先々御さ
たを経られ候、（裏紙中）闕如に及候て、力なき時の御さたにて候やと存候、又三条大納言かさ
ねて参勤候へきとの御事候や、彼卿はハや両度まて勤し候うへハ、かならす下臈にわ
たし候ましきなともいかゝの様に存候、兼（広橋）秀事、不堪未練の儀にて以（中上）前円座をけかし候
へきと内々言上いたし候事なと候、誠出物のいたり千万なから、かつうは御用をか
けられ候故、又一流におきて勤しの例も候へは、その跡をもむなしくうつもれ候ハぬ
様にと思ひ、かひなき執心はかりの言上にて候、一（裏紙中上）流に例なき事にて候ハゝ、上首と
て実澄卿いくたひもきんし候へきなと申候へ□（とカ）もおもしろく候、例あるうへにてハ、
たゝいま闕如に及候ハすは、勤しかたき様に御沙汰に及候へき事、かつうは不便至極
と存候、なう祖仲（広橋）光卿参勤のとき、上（中下）首を済々候つる、ことに後三条太政大臣実冬公于
時大納言上首にて未役に候つる、叙位に参るへきかくこにて候つるを、仰にて第六
大納言にて円座をけかし候、かやうの例も御さ候、その時の当官公卿補任一紙しるし
し（裏紙中下）ん上仕候、かんよう左右大将・一条なと参仕にて候ハゝ、是非に及候ハす候、或家
に初例の御体、又ハ重役の輩に仰られ候へき事ハ、思食分られ候ハゝ、忝かしこまり
存候へく候、かやうに言上（上上上）いたし候ても、未口伝不可説のきにて、かへりてあさけり
の事にてと存候なから、譜代相伝のうへにさへ、当時とゝき候ハぬ事ハはんたのやう
に候へは、其名をかけまいらせたきかなはぬ執心までにて言上仕候、まちかく唯（日野勝光）秋院
左府なとも第（裏紙上上上上）七大納言にて卅二才のとき奉仕仕候、返々闕如に及ての御事ハ、家に例
なき時の御事にてと存候、万里小路も仲房公はしめて勤し候て、その後嗣房・時房両
公は御沙汰に及候ハす勤し申候、此等趣宜様御ひろう頼存候、巨細言上弥自由にあひ
に候、宜様頼存候、かしく、

（裏紙奥端書）「勅書請文案」（天文十三年十二廿六叙位執筆事）

（天文二年（一五三三））五月七日付大宮伊治書状

（後期展示）

勝興寺西堂、・阿川淡路入道（勝康、法名真牧）

以両人令啓上候、抑左京大夫（大内義隆）兼国

并加級御申沙汰忝存候、殊

雖被支申候方候、勅許一

段畏入旨申候、公私御礼等

事、以別紙申上候、彼両人

可令持参申候、未陣中無一

途候間、伊治（大宮）上洛延引仕候、更

不存疎意事候、此使能々可被

尋仰候、公儀御取成可畏入候、

又左京大夫尋申候子細以一紙申候、

具可被注下候、徳大寺（実淳）殿被仰下候

段、一向無承引候、義隆気分

正直候間、上手御返事不可然候、

地下諸大夫可被准候者、礼節

已下可相当候覚悟候処、公卿」

可被准之候哉之由、一向無覚

悟候事候、又古記一巻被下

遣候者可然存候、一段望之由

申候、宮内卿（勘解由小路在富）殿〈令推参候哉、御

羨存計候、此方雖陣中候、

日夜大酒計候、迷惑不如

之候、返々種々御取合之由

申下候、雨山畏入候々々、猶

以後便可申上候、恐々謹言、

（天文二年）
五月七日　伊治上

（切封ウハ書）

「　従長門府中

官務

（高橋宗衡カ）
雅楽助殿　伊治上」

◆『頼資卿熊野詣記』（後期展示）

（一二一〇）
承元四年九月二十日～十月十五日条

九月廿日、乙巳、今日入熊野精進屋、三御山也、奉伴春宮（藤原資実）権大夫殿、
御参廿五度、予七度、今年二个度参三御山、広劫之宿縁也、可
悦々々、（藤原家光）秀才・阿闍梨実浄大夫殿御子、同道、
廿四日、己酉、払暁進発如例、天曙程乗船、河水過半竭之間、
自東川着渡部、于時入夜、初夜程着天王寺宿、所作如例、
十月三日、戊午、着本宮、即着清浄衣奉幣、予供養恒例
自筆心経、信心甚妙、実宿縁之至也、可悦々々、於三鍋王子所作
居眠之間、忽蒙示現、落涙不休、聊有所願、是路次王子宝前
「（首付）路次王子可奉懸御正体御願事」
毎参詣度、雖両三所計略出来之時、可奉懸御正体鏡之由也、
必不可忘却、当時原憲之間、無術計、仍有所期、
四日、己未、乗小船参新宮、即奉幣、当時長厳僧正給阿波国
奉造替仮神殿、在本御殿後十二所相双給、
予於宝前拝蛇出仮殿、若宮殿下蛟入新造五体王子下給、神
人吉事也、早可奉拝之由示予、々・阿闍梨実浄両人拝之、
五日、庚申、参那智、即奉幣、瀧下巡礼拭涙而拝、
六日、辛酉、着新宮、
七日、壬戌、着本宮、
八日、癸亥、本宮逗留、拝湯峯沐浴、不異驪山之温泉、

九日、甲子、着近露、
十日、乙丑、着田部、
十五日、庚午、入洛、

◆『脩明門院熊野御幸記』（前期展示）

## 承元四年（一二一〇）四月二十七日条

承元四年四月廿七日
〔修〕脩明門院御幸第六度
御先達大僧正法印大和尚位長厳度々
御導師権少僧都法眼和尚位隆円第
正三位行民部卿藤原朝臣長房第廿一度
参議従三位行右近衛権中将兼備中権守源朝臣有雅第十三度
従四位上行左近衛権〔少〕中将兼備後権介藤原朝臣信能第三度
造東大寺長官従四位下行権右中弁藤原朝臣宗行第廿二度
従五位上行少納言兼侍従紀伊権守藤原朝臣頼〔資〕―第六度
蔵人蔭孫正六位上藤原朝臣康定
正五位下行木工権頭藤原朝臣清実第三度
正五位下行大隅守藤原朝臣康業第
正五位下行左馬権頭兼伯耆守藤原朝臣忠綱第
散位従五位下藤原朝臣信経第四度
従四位上行陰陽権助兼権陰陽博士伯耆介安〔倍〕部朝臣晴光第
「〔首付〕両道未参上北面云々、仍如此、」
従五位上行侍医兼（アキママ）介和気朝臣基成第
従五位下行隼人正藤原朝臣成重第十六度
正六位上行左衛門少尉紀朝臣久政第
正六位上行主馬首兼左衛門少尉藤原朝臣秀能第
正六位上行左兵衛尉源朝臣湛第

正六位上行右兵衛尉藤原朝臣景家第

正六位上藤原朝臣有久第

那智路浜宮連書此定也、於度数者依三御山度、

今度主典代已下不書之、是常事云々、院御幸必書之歟、

◆『年号勘者例』（通期展示）

宝治度

○

参議左大弁経〔光〕卿　元応唐書　正安晋書

式部大輔淳高卿　寛正史記　禄長後漢書　天聡晋書

博士経範朝臣　宝治春秋繁露　文仁春秋緯　嘉元脩文殿御覧

建長度

前権中納言経〔光〕卿　文安晋書　元応唐書　建長後漢書

刑部卿淳高卿　元寧東観漢記　応元周易　寛安毛詩注疏

従三位経範卿　文仁淮南子　嘉暦唐書　嘉元脩文殿御覧

博士公良朝臣

大安 漢書　長仁 貞観政要
延元 梁書
同長成朝臣
長禄 韓非子　正元 毛詩緯
延嘉 孝経援神契

## ◆『正応以来年号勘者例』（通期展示）

正応以来年号勘者例 良賢注進

正応以来年号字勘者人数例

正応度五人
式部大輔藤原茂範　文章博士菅原長輔
民部卿藤原資宣　大蔵卿藤原経業
従三位菅原在嗣

永仁度六人
式部大輔藤原兼倫　文章博士菅原在輔
文章博士菅原在兼　従二位藤原茂範
参議左大弁藤原兼〔仲〕　大蔵卿菅原在嗣

正安度五人
式部大輔藤原明範　文章博士藤原淳範
文章博士藤原敦継　前権中納言藤原兼〔仲〕
前参議菅原在嗣

乾元度五人
文章博士藤原淳範　文章博士藤原敦継
前権中納言藤原俊光　前参議菅原在嗣
勘解由長官菅原在兼

嘉元度五人

文章博士藤原淳範　文章博士藤原敦継
前権中納言藤原俊光　前参議菅原在嗣
勘解由長官菅原在兼

徳治度五人
式部大輔菅原在輔　文章博士藤原淳範
文章博士藤原敦継　前権中納言藤原俊光
前参議菅原在嗣

延慶度四人
式部大輔菅原在輔　文章博士藤原淳範
文章博士藤原敦継　前権中納言藤原俊光

応長度五人
式部大輔菅原在輔　文章博士菅原在登
文章博士藤原資名　前権中納言藤原俊光
勘解由長官菅原在兼

正和度五人
式部大輔菅原在輔　文章博士藤原種範
文章博士菅原在登　前権中納言藤原俊光
勘解由長官菅原在兼

文保度四人
式部大輔菅原在輔　文章博士菅原家高
民部卿菅原在兼　左大弁藤原資名

元応度五人
式部大輔菅原在輔　文章博士菅原在登
文章博士藤原資朝　前権大納言藤原俊光
正二位菅原在兼

元亨度二人
文章博士藤原資朝　文章博士藤原家高

正中度五人

式部大輔藤原藤範　文章博士藤原行氏

文章博士藤原有正　式部権大輔菅原在登

大学頭藤原家高

嘉暦度五人

式部大輔藤原藤範　文章博士藤原行氏

文章博士藤原家倫　式部権大輔菅原在登

大学頭藤原家高

元徳度三人

式部大輔菅原在登　文章博士藤原行氏

文章博士菅原在淳

元弘度二人

文章博士菅原在淳　文章博士菅原在成

◆『改元部類記』（通期展示）

**奥書**

康安二年（一三六二）南呂中旬以右（鷹司冬通）相府御本蜜々写留之、

前黄門侍郎（藤原兼綱）（花押）

◆『仲光卿記』（通期展示）

**貞治二年（一三六三）正月二十八日条**

廿八日、天晴、除目入眼也、乗燭□□酉剋許■参、今日大（足利義詮）樹令参内、軒騎遮巷、先為伺見路次、令遣出車於鷹司東洞院邊、■■暫雖相待、時刻推轉之間、先参内、見物雑人如稲麻、到陣中軒騎充満、太狼藉、先之両貫首・右中弁行知等被候小板敷、予加着雑談、

人昇進事 人々○競望、衆口嗷々云々、就武家
今夜可任大納言云々、珎重歟、予弁官所望事、大略不達
醜懐歟、為身為職 可謂○不便歟、入 典 侍 (廣橋仲子) 殿 見参、令相語給云、
弁官事、御見参時已被申、早可献内挙、懇望云々、然而 被閣○上首難被任
由、有御沙汰云々、勿論々々、 於予所望者○ 無被申立事、旁 是歟○以内挙望
申、争及豫儀哉、就中礼部已被任他人、於今者、
為無官之身、旁不便歟、此間 三 (日野宣子) 品 召予、被伝 勅語
云、弁官事、旁有被思食之旨、今夜不可有御沙汰、
礼部事、武家数輩挙申畢、于時被思
食忘、悉忽被任了、于時不被轉他官之条、誠
為御越度、今夜可被任治部権大輔云々、予申云、
弁官事、其闕已及四年候、乍寄何事旁漏其恩
候之条、歎存候、然而猶有被思食之旨、無御沙汰之由被
仰下上者、■申候、礼部事可隨 勅定之由、申入了、
蘭台之事、○徒乍被闕不達微望之条、可謂不便歟、五位職
事三人相並弁官例、先規○又勿論、心中冷然、頃之
雑色男告来云、武家○只今参中 勘解由 御門小路東洞院邊云々、
予同車右中丞、予車、 納 言 (廣橋兼綱) 殿 ・ 老 (仲光母) 堂、 又御阿々以下
令乗給之故也、頭弁・右中弁・左少弁・予
四人同車、於近衛東洞院見物、大樹馬令引
車前、次雑色四人挙松明、大樹 衣冠下 結、・ 吉 (氏頼) 見 太刀役 人、・
(義行) 渋 川 弓 役、・ 津 (摂津能直) 将 監 沓 役、以上三人、着布衣供奉、 (斯波高経) 執 事 修理大夫入 □□□、・
侍所 前佐々木前治 部大輔高秀、以下諸大名等着直垂、従後□□□
壮観也、大概見了、飛車自高倉面参内、相公
羽林昇自高遣戸、佇立青璅門邊六位・主殿司□□
挙脂燭、主上・ 二条 前博陸等密於台盤 密○御覧、則藤 (日野時光) 中 納 言
出自台盤所妻戸、向大樹気色、則申事由、帰出、

引導○於議定所御対面、大樹候板、無程入御、相公羽林則
退出、「（右傍書）大樹退出之時、前関白出自台盤所妻戸、乍立令謁給、」

◆『柳原第行幸親王宣下記』（通期展示）

則帰参、被計申趣所申入也、葉室前
中納言衣冠参会、行幸事伝　奏之人也、
申刻許退出、則改著束帯、巡方帯、不付魚袋、具乗馬、参
内、　聖上遷幸藤中納言忠光
卿柳原第、《今出河以西、四辻以南、仙洞之北隣也、故按察資明卿経営始歟之地也、新造後
及卅餘廻歟、》仲光所奉行也、○御歟譲国之礼、於此
所可被行之故也、○御歟脱＝（尸＋徙）後、又可為万年之
仙居云々、仰蔵人式部大丞藤原懐国、令供御装束、
撤畫御座、母屋庇御簾共巻之外無殊儀、
子刻許人々太略参集、（二条良基）大閤　令候給、然而（二条師嗣）左幕・
近衛（兼嗣）亜相　等未令参給、空及半更了、召仰
事、就早参相触（通氏）中院　中納言、且伺天気了、納言
著就仗座、奥、仲光両手持日時勘文、文頭在左、行幸并賢所渡御日時、以上両通也、
昇参議座末、就納言座下、仰云、今日可有○行幸
柳原第、召仰諸司ヲ、上卿微唯、次仲光自懐中
取出幸路注文、折紙、下上卿、仰云、出御左衛門陣、
洞院ノ東大路北行ヘ、一條ヲ西行ヘ、此次々悉
不仰之、上卿懐中後、仲光左廻退去、

◆『仲光卿口宣案』（前期展示）

巻首

第一

蔵［（人治部権大輔藤原仲光）］

（一三六二）

口宣案（康安二八八巳後）

◆『貞治二年仲光卿奉行綸旨并御教書案』（後期展示）

越後国円通〇禅寺、宜為御祈願所者

天気如此、仍執達如件、

貞治二年（一三六三）三月□日　　治部権大輔（藤原仲光）（花押）

□弁上人御房

［（可令）］除服［（出仕）］給者依

天気言上如件、仲光謹言、

二月廿三日　　治部権少輔仲光奉

進上　新中納言殿

※虫損箇所は転写本の「勅裁口宣」（柳原家記録七七）により補った。

◆『仲光卿譲状』（通期展示）

わか候はさらんあとの事、千代も心の

猶さりは候ましけれとも、たゝなを

さりの候はぬはかりにても、ことはり候はぬ事にて候

人のきよくせ（曲折）ちけ（教戒）うかいをなん（何条）てう

さる事か候はんそと、きう（糺明）めいし候事は

ちとちからの入事にて候、さ候はてはやかて

いひまくらかされ候ならひにて候、そなた方
心もとなく候、
■■■■■■■■■■■■■■■■ゑもん（竹屋兼俊）
の督は物をもかき候はす、物をもよみ候はねは、
はか／＼しきほうこう（奉公）もかなひ候まし、ほう
こうかかひ／＼しく候はさらんに、御をん（恩）のそみ
申入候はんする事、ことゆき候まし、かたの
ことくもわか身かはからひおき候はては、にて
候程に、ちとつゝとりあつめ候て、万疋はかり
をはからひあてゝ候、

## ◆『女房奉書并消息』（通期展示）

### 四月十五日付女房奉書

ひる申され候つる源氏の三ヶ条、かたのことくしるしつけられてまいらせられ候、物さはかしく候て、いよ／＼正たいなき御筆のあやまりも候はんとおほえ候、猶／＼大かゐかんようはかりをしるしつけられて候、よきやうに御心え候て、けさんに入られ候よし申とて候　さて一日の御ものかたりにとのゐものゝふくろの事ちと申され候し、かのせちを」ひろはし□□のへうちにちよくせちのふんをかやうにしるしまいらせ候ほとに返々しようなるやうに候へとも、もし／＼一日申され候しをもむきを御ものかたりや申され候はんすらん、御わたくしに御わすれもや候はんすらんとて、まめやかに御め一しるしてまいらせられ候、かまへて／＼しせんけさんなとには入られ候ましく候、もし御わたくしに」御ものかたりに申され候しせちをあそはしつけられてまいらせ候、もしも御申や候らんとて御わたくしの御め一にて候よし、よく／＼申とて候、かしく、

## ◆『守光公書状案』（通期展示）

一、除目申文事
年々可献候於大宰府者監典間、何ニテモ可被申
請候、他官者三公・大中納言・参議・左右大将・八省卿・

左右衛門督・左右兵衛督・弾正尹・左右京大夫（為例、但非多分候、）
其外蓮奏ナト申ハ陰陽寮・典薬寮・主計・主税寮ナト
連署申文候、四道挙ト申ハ北堂（紀伝事也、）・明経・算道
申文候、左右馬寮頭ハ不献申文候、雖然、為御監左右大将
馬允申請事候、除目於申文案、去々年進之キ、其分候、
一通案事、承之如此候、

申文一通献之候、可被撰入給候也、仍執――、
三
二――　　大宰大弐義（隆）―
謹上　（広橋国光）頭弁　殿

一、叙位時者転位叙爵計候、任官者無之候、叙兼載聞書候、
左近中将・右近少将如元類候、惣別叙位ハ以二省丞（式部、民部、）申状
最前被叙之候、其次王氏并源藤橘氏爵、次院宮申文、
其以後諸司、左近府奏（近カ）□衛□以下次第有子細承之、
叙爵叙□加級逆上叙之候、執筆故実口伝以下有之事、
又懸召除目ニ任京官、京官に任外国、是古来定事候、
春除目ハ初中夜任外国竟夜大略京官候、為除
目、次行叙位事勿論候、乍去無請印候、
一、兼国事、御父子同国不可有難歟、然者被待秩
満可然存候、

## ◆『足利義成元服記　文安六年』（通期展示）

（外題）
「（足利義政）御所様　（一四四九）文安六
御元服記録　摂津掃（之親）部頭調進之」
（袖書）
「此一冊者摂津修理大夫之親朝臣（于時掃部頭

記也、不慮触眼之条、令書写了、彼
朝臣者下官祖母■之（類カ）□　親也、非無
旧好者哉、
天文十五年十二月十二日（一五四六）　亜槐（広橋兼秀）（花押）」
文安六年四月十六日　御□□
御元服
当日賀茂従三位　在勘解由小路）貞　朝臣択申
加冠　執権従四位下武蔵守　勝元（細川）　朝臣
理髪　中務大輔　持経（細川）
打乱　淡路守　持親（細川）
泔杯　右馬助　成賢（細川）

◆『県召除目成文』（通期展示）

天文二十年三月二十五日付大内義隆年給申文案（一五五一）

従七位上文宿禰徳名
望諸国司　肥前
右当年給所請如件、
天文廿年三月廿五日　参議従二位行兵部卿兼侍従太宰大弐多々良朝臣　義隆（大内）